

出荷量を伸ばす九州のキャベツ産地

～九州のキャベツ生産は、大区画水田、大規模経営、法人化、機械化～

森下俊哉（東三河農林水産事務所田原農業改良普及課

【平成27年11月16日掲載】

【要約】

鹿児島県曾於南部（図1）は、農業法人を中心にキャベツの大規模経営を行っており、加工用を主に出荷している。恵まれた土壤条件を活かし、密植栽培でも比較的大玉を生産している。熊本県不知火干拓（図1）は、大区画水田を利用したキャベツ栽培に取り組んでいる。水田に対応して高畝として畝間かん水をするとともに、疎植栽培で大玉を生産している。

1 はじめに

愛知県は全国一のキャベツ出荷量があり、特に冬キャベツは2位の千葉県の約3倍にあたる185,600tの出荷量を誇っている（平成26年産農林水産統計）。近年は加工・業務向けのキャベツの需要が比較的安定しているため、他産地もキャベツの生産に力を入れている。そこで、中でも急激に出荷量が伸びている鹿児島県と熊本県の栽培状況を調査した。

2 鹿児島県曾於南部地域

鹿児島県曾於南部は、大隅半島の東部に位置し志布志湾に面しており、平成元年から平成20年にかけて国営かんがい排水事業が行われた畑地帯である。志布志市の年間平均気温は16.8℃、日照時間は2,024時間で、愛知県（伊良湖測候所は16.0℃、2,202時間）より温暖ではあるが日照時間はやや少ない。また、桜島の南東に位置しており、しばしば降灰がある（写真1）。夏季は飼料作とサツマイモが多く栽培され、冬季はダイコンが中心で、近年は農業法人を中心にキャベツの作付けを増やしている。かんがい用水は利用申込みをしたほ場のみ利用料を払う方式で、利用率はあまり高くないとのことである。



図1 視察先の位置図



写真1 桜島噴火によるキャベツへの降灰

キャベツの栽植様式は、畝間60cm、株間24~27cmの単条植えて、本県の東三河地域と同様である（写真2）。土壌は黒ぼくで排水性が良いため、降雨後早くから作業可能であり、湿害も発生しにくく、東三河より恵まれている。一面にキャベツが栽培されているような所はなく、ダイコンやハクサイほ場が混在していた。このため、周囲に同じ作物ばかりの東三河地域と比べて病害虫の発生は少ない傾向があった。苗はセル成型育苗して従業員が手作業で定植する農業



写真2 曾於南部のキャベツ栽培

法人が多いが、一部では定植機も導入されている。かん水は、大面積を自動でかん水でき、大規模経営に適した、自走式散水装置の「リールマシン」等により行われている。

訪問したキャベツ出荷組合は、2法人と3戸の農家で組織され、50haのキャベツを栽培し、全量加工向けで11月から6月まで契約出荷している。一部パレテーナでの出荷もあるが、多くは15kgの平箱ダンボールで出荷している。品種は、年内は「おきな」、年明けは「夢ごろも」、初夏どりは「初恋」を栽培しており、連作を避けるため、ダイコンやサツマイモとの輪作体系をとっている。

3 熊本県不知火干拓地

熊本県の不知火干拓は、八代平野の北部に位置し不知火海に面しており、昭和26年から10年の歳月をかけて干拓された新開地で、耕地360haを有する水田地帯である。八代市の年間平均気温は16.8℃で志布志と同じであるが、日照時間は1,956時間でさらに少ない。もともとは水稲とイグサの輪作体系が中心であったが、イグサの作付け減少に伴い、キャベツを中心とした野菜と水稲の輪作体系が多くなっている。訪問した平成26年12月には、キャベツの他にハクサイ、リーフレタス、ブロッコリー、カリフラワー等が作付けされていた。



写真3 不知火干拓のキャベツ栽培
(写真の左右で品種が異なる)

キャベツの栽植様式は、排水性を確保するため、畝間135cmの高畝に、株間30cmで2条千鳥植えており、疎植により大玉を生産している。道路沿いに3m前後の枕地を配し、ハイクリアランスブームスプレーヤ等で効率的に作業しやすい配置としている。長さが200mもある大区画ほ場のため、1ほ場の中で品種や作型を変えたり（写真3）、栽培品目を変えている（写真4）所もあった。かんがい用水は、スプリンクラーやハローガン等のか

ん水装置は使用せず、水田用の水口から通路に水を流す畝間かん水により均一にかん水している。水田にもかかわらず、湿害等による生育不良や黒腐病の発生は少なく、順調な生育をしているほ場が多かった。

訪問先の生産者は、夫婦二人で、「冬藍」2ha、「冬のぼり」1haを作付けていた。1回目の追肥は、定植2週間後に畝の条間に施用、2回目は4週間後に畝の肩に施用し、その後は基本的に追肥しないとのことである。湿害対策として、山砂やカキ殻を投入して排水性の改善に努めていた。



写真4 キャベツとカリフラワーの混植

4 まとめ

鹿児島県は法人による大規模経営、熊本県は大区画ほ場による作業効率を高めたキャベツ栽培に取り組んでいた。土壌条件は、鹿児島県が排水性の良い黒ぼく土、熊本県が水田であり、本県と大きく異なっていた。気象条件も含めた栽培条件を考慮して栽培技術を開発していくことが重要と考えられた。また、両産地ともに加工・業務需要を重視して大玉生産を行っており、本県においても加工・業務需要への対応を強化すべきだと再認識した。